

青春の彷徨

教育・昭和46年卒 藤原 政志

【人は誰もただ一人旅に出て 人は誰もふるさとを振り返る ちょっぴりさみしくて振り返っても そこにはただ風が吹いているだけ 人は誰も人生につまずいて 人は誰も夢破れ振り返る (はしだのりひことシューベルツ『風』)】街にはそんなメロディーが流れていた。作家五木寛之氏や作詞家岡本おさみ氏の月の半分は旅の途上の生き方にも懂っていた。昭和42年教師になろうと大学に入学した。学生の研究室はまだ木造の建物で教育学研究室に入った。学長さんと懇談する機会があり、私は当時の前川学長先生に大学は休講が多くて困るという発言をしたら、「それは君がまだ大学生になりきれていない。大学は自ら探求する場所です」と言われ納得した。大学祭でビールの味を知り、ダンスパーティーでジルバを踊ったりと毎日が楽しかった。しかし、大学2年の6月父が突然亡くなった。以後、バイトの生活で料亭の皿洗いをはじめビルの窓拭き、カメラ屋、キャバレーの受付、旅館の布団敷き、工事現場の旗振り、家庭教師等々。もう大学を辞めようかとも思った。そんな時期であった。入学時より親しくしていた友は強烈な個性の持ち主でエネルギッシュであった。しばらくいないと思ったら漁船に乗って東シナ海へ。ある時は大阪のあいりん地区に入り仕事をして金を稼いでくる。全共闘のデモにも参加と。20歳の夏休み、前半バイトをして1万5千円を持ち二人でヒッチハイクの旅に出た。高松のフェリー乗り場で夜トラックに乗せてもらい、明け方西成区のあいりん地区に入った。治安が悪いので服は土で汚し、数日間一泊百円の宿を拠点にして動き回った。朝のバスに群れる日雇い労働者、夕刻路上で寝る人々、まさに社会の裏の世界であった。君たち学生だろうと近づいてきた人がいた。夏の甲子園決勝で三沢高校は延長18回の死闘を繰り広げ、三沢出身者でとても喜び奢ってくれた。ようやく大阪を出るが、京都、名古屋、岐阜を経て能登半島へ。車待ちをしていたら近くのおじさんがビールを持ってきて飲んだり、能登の恋路海岸で大阪の若者に世話になった。糸魚川から長野へ。同じ年頃の子をもつ人が行動力をかってくれ小遣いを頂いた。軽井沢を経て朝目覚めたら東京であった。山谷に泊まり社会見学の日々である。当時「風月堂」が有名で才能をもった若者たちがたむろしていた。夜日暮里駅に下りて宿へ帰っていく時、いつしか岡林信康の「山谷ブルース」を口ずさんでいた。帰り東京タワーのネオンが輝いていた。東海道を走り出発から36台のトラックや車に乗せてもらい、夏の終わりの雨の日高松に着き彼とささやかな乾杯をあげた。不思議と生きる力が湧いてきた。その後、私は教師になったが、彼はいつしか学内から姿を消していた。